

將軍侍講 成島柳北の公と私

——万延元年の『硯北日録』による——

高橋 昭 男

一 將軍侍講 柳北の一年

成島柳北の日記『硯北日録』は、十八歳の安政元年（一八五四）より二十四歳の万延元年（一八六〇）までの七年間の分が遺されていたが、現在は安政六年の分が失われている。影印本⁽¹⁾により安政六年分以外のすべてを読むことができ、一日も欠かさず記録されていることを確認できるが、万延元年の分は十二月九日までで終わっている。青年時代の成島柳北を知るうえで、欠くことのできない一級の資料である。

成島柳北は安政元年（一八五四）十八歳にして家督を継ぎ、將軍侍講見習に任じられる。安政三年（一八五六）將軍侍講に就任し、文久三年（一八六三）までその職にあった。『硯北日録』には、將軍侍講の公務としての活動が、欠かさず記録されているが、通読してみると万延元年が、公私にわたり最も多忙を極めており、柳北の行動をみるのには最適である。そこで『硯北日録』の万延元年の一年分を検討することで、青年儒者成島柳北の日常を見てみよう。

正月大

朔 丙寅。曇乍晴。五更起、梳浴。讀大學經一章。登殿。拜賀如本城舊儀。午下拜聽。上讀大學三綱領于便殿後堂。（原文句読点なし）

一日 丙寅。曇り、乍ち晴れ。五更に起き、梳り浴す。大學經一章を読む。殿に登り、拝賀するに本城に如くこと旧儀なり。

午下、上の便殿後堂に大學三綱領を読むを拝聴す。

（將軍侍講の勤めは、元日の登城から始まる。午前五時ころには起床し、頭髮を整え、入浴して身体を清め、『大學』の一章を読む。午前中、城内では旧例により元日の將軍への拝賀の儀がある。午後、休息の間にて將軍自ら大學三綱領をお読みになるのを拝聴する。）

元日の記事を読むと、治政の学としての儒学のなかで、『大學』の占めている位置の大きさが見えてくる。將軍侍講としての儒者柳北は、早朝に邸内で『大學』の一章を読むことから一年のスタートをきる。『大學』⁽²⁾という経書の意義について、源了圓氏は次のように述べている。

「修己―治人」ということを軸にして、「明德・新（親）民・止至前」ということを「三綱領」とし、「格物・致知・誠意・正心・修身・齐家・治国・平天下」の八条目を立てたこの本はやはり儒教思想のエッセンスといふべき本であると思う。（中略）儒者たちが一個の人間としての自己の問題と、「君子」

——統治階級の一員としての公的責任の問題とを統合的に捉えようとする時に、この『大学』から出発し、これを叩き台として自分の思想を練り、また逆にこの本を自分の納得ゆかたちで解釈してきたこと、またその軌跡として江戸儒学における思想の展開があったことはきわめて自然なことであると思う。

別項で取り上げるが、徳川幕府は文治を以て政治の根幹とした。年頭にあたり、將軍が臣下に向つて「大学三綱領」を朗読することは、きわめて象徴的な儀式であり、まさに「統治階級の一員としての公的責任」を、將軍も臣下ともに確認しあう場なのである。この後、二日、八日、十三日と登城するが、あまり用事は無いようである。十八日から侍講が始まる。『小学』王涯賈餗章の講義である。一月はこの後、ほぼ一日おきに講義がある。年間を通してみると、登城と侍講の回数は次のようになる。

侍講	登城	月
⑥	⑫	一
0	⑧	二
⑧	⑫	三
⑬	⑮	閏三
⑬	⑬	四
⑫	⑭	五
⑩	⑬	六
⑩	⑩	七
⑫	⑭	八
⑬	⑮	九
⑩	⑬	十
⑤	⑮	十一
③	⑥	十二
115回	166回	計

登城はほぼ一日おき、侍講はほぼ三日に一度である。これが侍講

としての基本的公務であるが、このほかに昌平坂学問所の実紀局での勤務がある。この年は実紀局へは年間で二十一回ほどの出勤であった。柳北は三百俵扶持の旗本であるが、それに將軍侍講としての役料二百俵が付いた。

ところで、將軍侍講の職には、もうひとり小林茶太郎がおり、『日録』によれば、交代で講義を行なっていたようなので、ほぼ毎日のように侍講があったということになる。さらに侍講のほかに、林大学頭や昌平坂学問所の教授などの講義もあるから、將軍職とは日常の政務をこなすかたわらで、学問研鑽に相当の時間を費やすわけで、幕府の文治主義の徹底ぶりがかげがえる。

儒者としての仕事は、こうした公務の外に、邸内での家塾の講義や他家への出張講義がある。

一月、二月の日記から摘録する。一月は、

十八日 夜之棠邊發會。（奥医師・多紀棠邊宅での出張講義）。

十九日 詩歌發會。（成島家のもう一つの家学、和歌の会）。

二十一日 開書廳学兒十余名來。（子供たちを対象にした塾）。

二十九日 論語開講（季氏卒業）。（論語の季氏篇の講義が終了）。

二月に入ると

九日 論講陽貨開業。午下八大家文開讀講。（論語の陽貨

篇が開業され、唐宋八大家文も開講されている）。

十二日 書藉講及煎茶講發會。（書藉講の内容は不明だが、

集まる人が多い会。煎茶講は文人の嗜みとしての煎茶の会であろうが、その都度、煎茶に関する文献を

読んだか。

二十三日 小集。枕山、櫻齋、雪江、奚疑、梅村、蓑香等来。

(日記中、小集とあるのは漢詩の会である。前年から大沼枕山も参加している)。

この年の家塾の開催回数は次の通りである

月	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	計
講義	④	⑤	⑨	⑬	⑥	⑧	①	①	⑩	③	③	④	0
													66回

閏三月は十三回を数えているが、一日に万延と改元されたこの月は大変多忙であった。儒者としての活動を、公務と家塾の講義を含め、『日録』から摘録する。

一日 命林学齋及余編纂藩翰譜三編。

二日 午下侍講。

四日 侍講。

七日 小学會。

八日 侍讀。永氏書籍講(義父の永井邸での講義)。

九日 論講。八大家會如例。

十日 侍讀。小書籍講。

十二日 侍講。

十三日 論講。八大家講如常。

十四日 侍講。

十五日 侍講如例。

十七日 小学會。

十九日 八家文會。

二十日 無次講(次講は柳北以外の講義に列席すること)。

侍講如例。

二十二日 侍講如例。

二十三日 論語開講。三河記開講。午下例月小集。

二十四日 侍講如例。

二十五日 侍講如例。

二十八日 侍講如例。

二十九日 八家文會。

三十日 侍講如例。

延べ二十一日にわたる講義である。下調べの時間も考慮に入れれば、儒者としてはかなり厳しい日程の生活と言えよう。講義の記録はほぼ確実に記録されているが、講義内容に関する記述、門弟たちへの評価といった記事は、皆無といってよい。しかしながら、將軍侍講という家柄を相続しているという自覚のもとに、篤実に勤務にいそしみ、家塾での教育、運営についても儒者としての誠実な態度で臨んでいるかみえる。

『硯北日録』がこうした儒者の講義記録だけで終わっていれば、まことに味気のないメモワールとしての日記でしかないのであるが、いくつかの興味深い記事が散見されるので、抄出し、注を付すことにする。

二 遊興する柳北

成島家は人の出入りの激しい家である。家塾があるから当然ではあるが、講義とは無関係の来客も多い。婚姻関係にある永井家との交際を始め、友人たちの来訪も頻繫である。また、柳北が知己の家を訪問する回数も少なくない。どちらにせよ、酒食のもてなしが伴うことも多かったであろう。柳北はかなり交際好きな性格と見える。陽気がよくなれば物見遊山の外出も多くなる。三月の日記によれば、遊興のための八回の外出が確認できる。

六日 庚午。晴又陰。与一壺、乘明石舟、以捕白魚于二州。味鮮。小喬隨焉。夜喬氏。

(友人の一壺と、明石舟に乗り、両国で白魚捕りをした。生きがよくて旨かった。小喬も一諸。夜は喬氏の家へ)。

明石舟は柳橋の船宿明石屋の舟のこと。柳北は舟遊びを好み、花見に月見、夏は烟花(花火)見物、と二州(両国)から向島あたりまで舟足を伸ばしている。喬氏は柳橋の芸妓で、前の年あたりから深い関係にある。小喬はその妹分の芸妓。

八日 壬申。陰。雨。侍讀如例。退後之永氏。書籍講。過喬氏。(登城し、侍読を終え、帰りに永井家の書籍講を済ませた後、喬氏宅に寄る)。

十六日 庚申。雨。訪喬氏。夜大風。

(この日は喬氏宅に邸から直行している)。

二十日 甲申。晴。登殿。無侍讀。過昌平局、之永氏。与芳

山訪喬氏、酌。篁氏、米發至。

(登城するも、侍読は休み「病気など將軍の都合によるか」。昌平坂学問所に寄り、永井氏宅を訪問し、永井家の同族の永井芳山を伴って喬氏の家に行き、酒を酌んだ。篁氏、米発も来た)。篁氏はお竹、米発は米八で、ともに芸妓。

二十一日 乙酉。陰。午下雨。与芳山赴本法寺集會。白井宗伴相逢。此日過長叔。過墨堤及金龍山、櫻花少綻。夜過喬氏。与坤藏面。

(友人の芳山と本法寺(成島家菩提寺)の集まりに出る。白井宗伴と逢う。長尾の叔父の家に寄り、その足で、隅田川の土手と、浅草にまわるが、桜はようやく綻んだというところ。夜は喬氏の家へ。そこで地藏院の坊主と顔を合わす)。

墨堤に立ち寄ったのは、桜の開き加減の下見といったところか。坤藏とは地藏の宛字。喬氏をめぐって、柳北は地藏院の住職と張り合っていたらしい。

二十五日 己丑。晴。暄。登殿。無侍讀。午下與恂齋倩舟于釋篁、訪花於墨堤、食膾殘、太美。八重児陪焉。晚復酌篁舍、過喬氏。岳母來宿。

恂齋(伊沢兵九郎)と舟を釋篁(若竹の宛字。柳橋の船宿)でやとい、墨堤で花見をする。膾残は肉の煮物のことであるが、『柳橋新誌』ではシラウオと訓んでいる。小鍋仕立てにでもしたのか、大変気に入ったようだ。お八重(八重児)という芸妓が相伴する。篁舍は竹屋という料亭。そこで酒を酌み、喬氏の家へ。帰宅すると、

永井の義母が泊りに来ていた。

二十六日 庚寅。暄。訪華芸氏、之喬氏。坤藏在。優勝五亦會。夜拉珠兒、赴河永。

(華芸「奥詔医師・吉田秀貞」氏を訪ね、喬氏の家に行くと、地藏院の坊主が来ていた。夜はお玉という芸妓を連れて、深川の永井氏宅に行った)。

優勝五の優には楽人の意味もあるので、長唄の杵屋勝五郎ではないか。芸妓を連れて個人の家を訪ねることは、しばしば行なわれていたようで、御典医の桂川甫周の娘・今泉みねの『名ごりの夢』にも、自宅で宴会を催すとき、しばしば芸妓を待らしたことが記載されている。

二十七日 辛卯。又暄。岳母、細君、阿復等訪花于瀧。余亦欲踵之。駕明石舟、購酒于喬氏、抵瀧。不及花候十分、暮色艶然。夜過喬氏。復与坤老面。

(義母、妻、お復など女どもが瀧堤に花見に出掛けた。余も亦、急いで後を追った。明石屋の舟を雇い、喬氏の家で酒を買い、瀧堤に行ってみると、満開とまではいかないが、夕暮れ時の残光を浴びて、花は艶めかしく咲き誇っていた。夜は喬氏の家へ。またも地藏院の坊主と顔を合せた)。

二十五、六、七と三日連続の花見である。まことに春風駘蕩とあった風情で、喬氏の家にもこの月は六回も出掛けている。侍説としての公務や、邸での講義に励む中、閑暇を見つけては積極的に遊興を楽しむ、青年儒者成島柳北のいかにも都会人らしいスマートな

過ごし方を、『硯北日録』から読み取れるのであるが、しかし、一方で、時は幕末であり、八年後には江戸城明渡しとなる、世情騒然とした時代の最中であつたのである。

三 柳北の政治的立場

三日 丁卯。雪霏。風凍。上巳佳節。登殿。奉賀照例。如本城朝。途見鬪傷者兩人于龍口。既而聞、今朝辰牌下、水藩兇徒十七名刃我元老彦根侯於櫻田門外。可堪憤排哉。可勝浩嘆哉。一酌排悶。芳山、一壺來話。

三月三日は五節氣の一つ、上巳の日、桃の節句にあたる。その佳節の朝、雪が霏々として降りしきるなか、登城の途中の柳北は、和田倉門近くの龍ノ口で、刃傷によるものと思われる手負いの二人の武士を見かける。聞くところによると、午前八時ころか、水戸藩の兇徒十七名が大老彦根侯井伊直弼を桜田門外にて刃傷に及んだという。怒りの抑えようもなく、悲しみのとどめようもない。酒を飲んで、苦しみを紛らわすしかない。芳山、一壺が話に来てくれた。

四日 戊辰。陰。直營。侍讀。伊澤、秋山來。昨日之議紛紜、不止。
(伊沢、秋山が来て、大老暗殺の事で議論が沸騰し、止まることを知らなかった)。

幕閣の中心人物が暗殺されるという、未曾有の事件が出来たのである。「可堪憤排哉。可勝浩嘆哉」というのは、將軍侍講という立場にあれば、当然の反応であろう。おそらく城内は大混乱の極に

あつたに違いない。しかしながら、それは表と呼ばれる公式の政務を取り仕切る場においてであつて、柳北が勤務する奥にあつては、いつもと変わらぬ時間が流れていたようである。奥とは將軍の住いする私的空間であるからだ。事実、四日以降の記載を見ても、いつも通りに講義が行なわれている。

表と奥との出入りは嚴重にチェックされており、互いの通行は原則として禁止されていた。柳北の祖父である成島司直は天保十四年六月、叱責の処分を受けているが、処分の理由は、表役と同様の振舞いをし、みだりに表と奥との通行をした、奥儒者は奥のみの勤めであり、表方とは没交渉であるべき就業規則に違反したといふのである。⁽³⁾

侍講という職は、將軍の私的な場である奥で、治政の原理としての儒学を將軍に教育するのが役目であり、現実の政治に対する発言などは許されることではない。侍講を奥儒者ともいふのは、あくまで奥向の將軍の私的な教育係ということで、御典医を奥医師といふのと同じであり、両者はほぼ同列に置かれていた。表と奥との通行禁止は、侍講という立場を象徴的に表している。現実政治とはかかわりを持つな、ということである。『硯北日録』においてさえも、政治的な感想等は皆無に近い。大老暗殺という幕府の根幹を揺るがすような大事件にあつても、右に引用したように、柳北の個人的感想として記載されているのは悲嘆をあらわす僅か十文字だけである。江戸城の中枢に勤務しておりながら、政治的発言を一切封じられていることは、柳北にとって相当のストレスとなつていたに違いない。

幕府とは、出征中の將軍の陣營を意味しており、『硯北日録』においても、登城することを、「登 營」「直 營」などと記載されている。開府以来、文治主義を治政の原則とした徳川幕府であるが、政治的に安定を見るのは八代將軍吉宗のころからと言われている。

表向きには、幕府という名の戦時体制を構えつつも、文治主義が漸く徹底されて、儒学を根本理念とする治政の方針が固められていった。成島家が將軍侍講職を代々勤めるようになるのも、この頃からであり、成島信遍（錦江）が初代の侍講となつた。享保四年より、その好學が認められ、奥坊主という身分でありながら、吉宗の休息所に召され、しばしば書を講じたとされる。信遍の後、和鼎⁽⁴⁾、勝雄、司直、良讓（稼堂）と続き、柳北に至つている。享保四年から数えれば、およそ百四十年間にわたり成島家の侍講職が続いたことになり、この年の一月十九日に、錦江先生百年家祭を行なつたことが、「十九日 甲申。晴。詩歌發會。且舉 錦江先生百年家祭賦」と『日録』に記載されている。

安政元年、柳北が家督を継ぎ、十八歳で侍講見習として奥儒者としての第一歩を踏み出した時、すでに世の中は事実上の戦時体制に入りつつあつたと言つても、過言ではあるまい。ペリー艦隊の江戸湾侵入をはじめとして、プチャーチン率いるロシア艦隊の動向も国防上の大問題であつた。幕府は未曾有の困難に取り組むのであるが、長く続いた太平の世に慣れてしまつた惰性の故か、危機管理体制の不備をいわずに放置しているがごとき状況であつた。『硯北日録』には城内で行なわれる年中行事の記載が、しばしば見られるが、旧

習を漏れなく守って、危機的状況など無きがごとく、あたかも別世界のような時間の流れが城内には漂っていた。『日録』を見る限り、安政元年から万延元年までの七年間、変わることなく行事は続けられていたのである。幕府は戦時の本営であるべき状況であるにもかかわらず、文治の余燼の中で、將軍は午後の一と時を、休息の間において講義に耳を傾けているのである。万延元年の柳北の侍講としての多忙な日程が、そのことを示している。

青年儒者としての柳北は勤勉にして誠実である。「経世済民」の学を奉じ、日々実践している青年儒者が、このような状況に手をこまねかざるを得ないのである。柳北の内面に煩悶はなかったのであるろうか。青年儒者柳北の唯一の内面吐露の手だては、漢詩による表現の世界にあった。柳北の詩集『寒檠小稿』には次のような七言律詩が収められている。⁽⁵⁾

歳晩書懷

天妖地孽耳頻驚
驚裏忽忽歲月征
春意練糸晴柳影
曉寒裂帛断鴻声
嗜書每笑身同蠹

歳晩、懐ひを書す

天妖地孽^{ちゆうげ} 耳頻りに驚く
驚裏 忽忽として歲月征く
春意 糸を練る 晴柳の影
曉寒 帛^{きぬ}を裂く 断鴻の声
書を嗜んで毎に笑ふ 身は蠹^とと同じきこと

提劍元期勢截鯨
十八年間成底事
自嘲碌碌鯁儒生

劍を提げて元期す 勢 鯨を截らんことを
十八年間 底事^{なごこと}をか成す
自ら嘲る 碌碌たる鯁儒生^{かうじゆ}

この詩は、柳北十八歳の安政元年の作である。前年に引き続き、ペリーの艦隊が来航し、この年の正月には江戸湾に侵入したため、江戸市中は大混乱におちいった。はじめの二句はその状況を示している。そして五句六句で儒生として書物を手放さない我身を、紙魚同然だと苦笑いする。自分はもともと劍をとって鯨を切る（外国船をやっつける）勇壮なことをやりたかったのだ、と言ひ、終りの二句で、十八年間自分は何をやつて来たのだと、平凡な取るに足りない儒者であることを、自嘲している。

このとき、柳北は十八歳の侍講見習の状態であり、悲憤慷慨の客氣を額面通りに受取つてよいものか、躊躇されるところもあるが、日野龍夫氏は、「儒学に対する有効性に対する懷疑が、儒学の家を継いだ当初から柳北をとらえていたことを示す」と論じている。⁽⁶⁾

四 『柳橋新誌』の執筆

勤勉なる儒者、花柳世界の遊興者、悲憤慷慨の士。二十四歳にして柳北にはいくつもの貌がある。その柳北が勤勉と遊興の合間にもしたので、後世に遺る花柳文学の傑作『柳橋新誌』である。これによつてさらにもう一つの貌、「文人」が加わる。

『柳橋新誌』初編の終り近く、柳橋の芸妓連中の名を列举した後、注して次のように記されている。⁽⁷⁾

此の編、己未仲冬に成る。故に此に列する者は、皆戊午・己未間の人なり。而して阿兼、菊二、小照、梅吉の若き者数名は、皆小妓にして、今茲庚申に至つて大妓と為る者。及び米八、延

玉の徒は、亦皆新たに名を掲ぐることに今年に在る者。此等は皆庚申の春秋、追補して記するに係る。

己未仲冬は安政六年十一月にあたり、その時、いったん稿が成つたことを示しているが、しかし、庚申の春秋に追補した旨が記されている。庚申の春秋は万延元年の七月にあたる。「硯北日録」の同年七月五日の条には、「五日 丁酉。晴。柳橋新誌成編。云々」とあり、この日に成稿したことが確認されるのであるが、筆を起したのは何時なのであろうか。それは柳北の外孫である大島隆一氏の著である『柳北談叢』の記事によって知ることができ、現在失われてしまった『硯北日録』安政六年の次のような記事が、引用されている。

九月朔 丁卯。風雨。登殿。拜賀例の如し。新誌を草す。

したがって、『柳橋新誌』は、安政六年九月一日に起筆され、同年十一月にいったん成編としたが、翌年の万延元年七月五日に追補を書き終えて、完成されることになる。

安政三年の十一月に將軍侍講に就任した柳北が、柳橋に出遊するようになるのは安政四年からで、二十一歳の年である。『日録』によれば、前年あたりから夫婦関係がこじれたのか、妻女の瀆がしばしば実家に帰る記事が見られ、この年の三月十七日には「此夜阿瀆大歸于其家」とあり、同二十五日には「如狩野氏、決細君大去之事也。携金廿圓返之」と見えて、正式に離婚した。このことは多少なりとも出遊の回数を増やす要因となつたのであろうが、一月も立たない四月七日の記事に「永井主膳母來、議再婚之事。蓋今

日而決也」とあつて、早々と再婚を決め、同十四日には「使嘉平於本所永井主膳氏、納采」とあり、二十四日には婚禮を挙げてしまうのである。永井家は七百石の旗本で、御書院番を勤める家柄であるが、主膳がその役を襲うのは安政五年のことである。

永井家との婚姻関係が成立したことが、実は皮肉なことに柳北の遊興の頻度に拍車をかける結果となるのである。というのは、当主の永井主膳が多趣味ないわゆる通人であり、弓の稽古をしばしば共にすることもあつて、柳北と意気投合してしまうのである。主膳の母という人もこれまた遊び好きのメリーウイダーであつた。料亭に舟遊びにと、柳北と永井家との遊興の回数が頻繁になる。

柳北の邸から神田川にかかる和泉橋まではほんの数百メートル、そこから柳橋までは歩いて十五分ほどか、舟を雇えば、神田川を東に下つてすぐである。『柳橋新誌』初編には次のように記されている。⁹⁾

夫れ柳橋の地は乃ち神田川の咽喉なり。而して両国橋と相距る、僅かに数十弓のみ。故に江都舟楫の利、斯の地を以て第一と爲して、遊舫・飛舸最も多しと爲す。其の南、日本橋・八町渠・芝浦・品川に赴く者、北、浅草・千住・墨陀・橋場に向ふ者、東は則ち本所・深川・柳島・亀井戸の来往、西は則ち下谷・本郷・牛籠・番街の出入、皆此を過ぎざる者なく、五街の娼肆に遊び、三場の演劇を觀、及び探花・泛月・納涼・賞雪の客も、亦皆水路を此に取る。故に船商の戸、舟子の口、星羅雲屯（ほしのゴトクつらなりくものゴトクたむろし）、他郷の及ぶ所に

非ずして、釣艇・網艇の徒、其の間に居る。

江戸の町は水路が発達していたから、交通機関として船は頻繁に用いられた。柳橋は、神田川が隅田川にそそぐ出口に位置しており、したがってここからは東西南北どこへ行くにも便利な地の利を得ていたので、必然的に船宿が集まり、遊客を運んだ。周辺には名高い料亭が軒をならべ、宴の席に侍る芸妓も多く、深川が衰退した幕末の江戸では、最も盛んな花街であった。柳橋の芸妓について『柳橋新誌』初編は記す。

江都、歌妓の多くして佳なる者、斯の地を以て冠と爲す。芳原・品川も、固より皆歌妓を貯ふ。然れども娼を以て主と爲す。妓は則ち之が役たるのみ。(中略)

其の粧飾淡にして趣あり。其の意気爽にして媚びず。世俗謂はゆる、神田上水を飲む江戸児の気象なる者にして、深川の余風を存するなり。他方に超乗する、亦是れを以てにあらざるや。

柳北の柳橋の芸妓に対する評価は、この二点に尽きるであろう。歌妓の本領はあくまで唄や三味線などの芸にあるのであって、やたらに枕を交わすような妓は低く見られた。衣裳もどちらかと言えば地味目、化粧もあつさりとしていて、気風は意気で爽やかで客に媚びない。水道の水で産湯を使った江戸っ子で、深川風の勇み肌で男っぽいような気立てを売りにした。

柳北は育ちの良い貴公子にして、將軍の侍講である。遊び方にも自ずと節度が求められたであろう。初めの内は一人で出掛けるようなことは、まず無かった。友人たちを引き連れ、明るく陽気に宴を

楽しんだに違いない。そうした柳北に柳橋は江戸っ子好みのうつつけの花街であった。そこに永井家の面々との交際が重なってくるのである。しかも永井家の邸は、柳橋の斜め対岸、堅川の最初にかかる一ツ目橋のすぐ近くであった。柳橋を挟んで両家の位置はほぼ同じ距離であるところから、柳橋はお詠えの好立地にあつたのである。

花柳界にとつて、柳北のような経験不足で、金離れがよく、おまけに上品なお坊ちゃんとくれば、最上の客であつたらう。授業料も高くついたに違いない。柳北の親友・柳川春三によれば、『柳橋新誌』を書き上げるまでに使つた遊興費は二千両を下らないであろうといわれる。金額はともかくとして、安政四年から万延元年まで、四年間の日記の記述からみても、遊興に費やした時間と金は莫大であつた。これが功成り名を揚げた相応の人物であるならまだしも、二十一歳から二十四歳という青年期の若者なのである。しかし家督を継ぎ、將軍侍講という要職にある以上、このような行動があつても、問題にされる筋合いのものではなからう。

無論、柳北はただの人の良いお坊ちゃんではなかつた。いたずらに金を捲きあげられていたわけでもない。柳北は、冷静な、というよりも冷徹な観察力をそなえていた。洗練の極致にまで磨き上げられた遊びの世界を、流麗な漢文で描き上げる一方で、金がすべてに優先する花柳界の実態を容赦なく暴露した。しかしながら、いわゆる暴露記事特有の品の無さというものが、まったく見られず、むしろある種の清々しささえ感じられる。明治に入つて刊行された『柳

「橋新誌」の表紙に、成島柳北戯著とあることが、柳北の文学に対するスタンスを闡明にしているのではないか。

「余や狂愚の一書生、凹硯秃筆、僅かに其の口を糊する者」と、序文において柳北は身をやつしている。「赤貧洗ふが如」きで、花柳の世界などまったく無縁な者だが、訳知りの遊蕩児の話聴いて、一書にまとめたという。正人君子が読んだら唾棄して棄てられる体ものだが、「正人君子の記すること能はざる所の者にして、余が輩の当に記すべき所なり」としており、一種の開き直りを見せている。そして「蓋し余の知る所の者を記すのみ。知らざる所の者は、亦將に狂愚余の若き者あつて附益せんとす」として、『柳橋新誌』という戯著のいわば正当性を宣言している。

この序文について前田愛氏は『成島柳北』⁽¹³⁾において、次のように論じている。

この輻晦のポーズを柳北があえて選んだ事情は、もう少しこみいっているように思われる。それはおそらく柳北自身の醒めた自意識、ないしは文学精神の核心にかかわる問題なのだ。私たちが落ちこみかねない誤解のひとつは、柳橋に耽溺する柳北に柳宮の職務から解きはなたれたひとときを無邪気に享樂している「蕩子」のありようを想定してしまうことだろう。この想定が紛らわしいのは、雅の世界、あるいは経学の世界につながるにあらわれている柳北と、市井の俗なる世界に遊ぶ柳北とのあいだにあつたはずの微妙な緊張関係がなしくずしに否定されているからだ。

「雅の世界、あるいは経学の世界につながる」と「市井の俗なる世界に遊ぶ」遊興者とのあいだの「微妙な緊張関係」を維持するものこそ、「やつしの美学」であると、前田氏は規定する。すなわち、「それは厳格な経学の世界からの解放を約束する証であるとともに、市井の俗なる世界にたいして一定の距離を用意することによって、彼自身の精神の自由を保持する一種の擬態でもあつた」。その精神の自由があればこそ、冷徹な観察力によって、俗の俗たる柳橋の花柳世界を、雅趣たっぷりに描き切つた『柳橋新誌』が生れたのであり、「文人」柳北の誕生となるのである。

五 風流の極意

唐木順三氏は『無用者の系譜』において、文人気質と風流との関係を次のように述べている。⁽¹⁴⁾

元来、文人気質といふのは、修身齊家を口先だけで説く道學先生に對するレジスタンスとして起こつたものであつた。尋常爲政者の期待に應じて支配者に好都合な學説をしかつめらしく學習する官學に對する野人、ディレッタントであり、意識して修身齊家をふみはずしたデカダンであつた。彼等はそこにおおの好むところの詩の世界をたてようとした。それが彼等の風流風狂の世界であつた。

柳北はまぎれもなく官学の人である。表向きは日々の公務を勤勉に果している。しかし、すでに見たように、儒学の有効性に対する懷疑の念が十八歳の作詩に、その萌しをあらわしていた。さらに、

『柳橋新誌』初編には次のような箇所がある。¹⁵⁾

夫れ修身齊家の講、若し用ふる所なくば（ヤクニタタヌクライナラ）、則ち彼の短畦・新詞の、以て人の耳を悦ばしむるに如かず。補陽調陰の匙、若し其の治を弁ぜざれば、則ち彼の興を鼓し酔ひを勧むるの象擬に如かず。笑ふべきのみ。吁嗟、世を濟ひ教へを播くの人、命を司どり天を救ふの人にして、却つて婀娜纖弱の女に愧づることある、哀れむに勝ふべけんや。

役にも立たない医者など、三味線や歌で座を盛り上げるかよわい芸妓にもおとる。唐木順三氏が指摘したように、柳北は「意識して修身齊家をふみはずし」てみせるが、ディレクタントであるには、官学に忠実にして勤勉であり、デカタンとなるには、將軍侍講という家柄が、それを許さなかつた。文人としての柳北が活路を求めたのは、「好むところの詩の世界」であつたに違いない。

成島家の詩会は毎月二十三日に開かれていたが、『硯北日録』によれば、万延元年の出席者は以下の通りである。

二月 枕山、櫻齋、雪江、奚疑、梅村、蓑香等。宮本又至。

三月 枕山、櫻齋、雪江、梅村、蓑香、奚疑等。

閏三月 田、渡、高、金、関、宮及枕翁。

四月 雪江、塚本。

五月 関、植村、宮本、石川、塚本等。二十五日には、遠田木堂を訪ね、大槻磐溪と逢う。さらに中沢雪城を訪ね、春田九阜、鷺津毅堂に逢う。磐溪以下の四人は大沼枕山

ループである。

六月 十六日に隅田川畔の六々樓で催している。月白風清。絶叫之景也。と、『日録』に記されており、既望（十六夜）の月を愛でながらの詩会であつた。大槻磐溪、遠田木堂、桂川月池、本梅顛。

七月 休会。

八月 雪江、董叔、櫻齋、奚疑、蓑香、石碇、冢、尚、青、允等。

九月 木堂、枕山、櫻齋、董洲、奚疑、蓑香、雪江、塚本。

十月 六日にも開催。竹西坡、木梅軒、槻磐溪、沼枕山、関雪江、植蘆洲、鷺毅堂、長旌峨、田櫻齋、金蓑香、渡奚疑等。賦小春雜興興味勃如、とある。二十三日 雪江、櫻齋、杉村。

十一月 枕山、櫻齋、蓑香、奚疑、雪江、塚本。

当時の錚々たる詩人たちである。大沼枕山は安政六年より参加していたが、そのことを永井荷風が『下谷叢話』に記してある。¹⁶⁾

此年秋の初に「枕山詩鈔」初編三巻が刻せられた。天保六年枕山十八歳の時より嘉永二年三十一歳に至る十五年間の吟作を哀めたのである。枕山は初め詩鈔を刻するに先だつて序文を幕府の奥儒者成嶋確堂に乞うたことが、確堂の「硯北日録」己未の巻に見えている。日誌に「五月二十一日庚寅。晴。小集。雪江、艇齋、枕山、櫻齋、由道、忠堂、恒藏等來。賦鬻餽詩。枕山翁託序其集」としてある。

己未の年は安政六年である。この時、柳北二十三歳、枕山は四十歳であつた。柳北は枕山に対しては翁をつけて敬意をあらわしている。枕山は官には属さない在野の漢詩人であり、柳北郎からもほど近い下谷御徒町に住んで、下谷吟社という幕末から明治にかけて最も勢力のあつた結社の総帥であつた。その枕山が、若冠の柳北に対して詩鈔の序を請うたのであるから、將軍侍講という職の重さが了解できる。

安政六年の『硯北日録』は失われているので、荷風が記した五月二十一日の記述は貴重である。というのは、この時のメンバーのレベルの詩会は、前年の安政五年の日記には見あたらないからで、少なくとも安政六年の五月以降より催されたということになる。

安政四年ごろから、柳北は柳橋に出遊していたことはすでに述べたが、友人たちや、永井家周辺の人々との、それなりに気の置けない、青春を謳歌する態の遊興であつた。ところが安政六年に入ると、大沼枕山をはじめとする、こうした当代一流の詩人たちとの詩会が催され、場所も柳北邸のみならず、濯水に舟を泛べ、料亭に芸妓を侍らしての、風流韻事の色合いが濃くなる。二十三歳の青年にとつて、一流の詩人たちとの交流は、それまで体験したことのないような精神的影響を、内面の深いところにもたらしたに違いない。「文人」としての意識が柳北をとらえはじめ、「風流風狂の世界」への志向があらわれてくる。

柳橋での遊興を『柳橋新誌』に作品化させたのも、これらの詩人たちによって自覚させられた柳北の「文人」意識にほかならない。

したがって、仮に安政六年の五月から枕山グループとの交流がはじまったとするなら、わずか四ヶ月後の九月には『柳橋新誌』の起筆を柳北に促すほどの影響を与えたということになる。もつとも柳北は、それ以前に『寒檠小稿』収められる、次のような詩を詠んでいたのではあるが。

夜過柳橋

夜、柳橋を過ぐ

古柳橋辺春水碧

古柳橋辺 春水碧に

新柳橋上春月白

新柳橋上 春月白し

夜深酒冷多少楼

夜深け 酒冷えたり 多少の楼

穗穂残燭耿簾隙

穗穂たる残燭 簾隙に耿らかなり

嬌爪換撥曲調低

嬌爪 換撥して 曲調低く

微風猶伝線線脈

微風 猶ほ伝ふ 線線の脈

彷彿秋江聽琵琶

彷彿たり 秋江に琵琶を聴きしに

身是非否謫居客

身は是れ謫居の客にあらざるや否や

多愁未占風流場

多愁 未だ占めず 風流場

青春一夢独自惜

青春の一夢 独り自ら惜しむ

借問月影柳色中

借問す 月影柳色の中

不知何処蘇小宅

知らず 何処か蘇小の宅

前半は柳橋という花街の風情を情趣纏綿と詠いあげ、後半は自らを謫居の白居易になぞらえて、華やかな花柳の場においても憂愁の気分をまぎらわすことが出来ぬまま、佳人との恋の夢が消えてゆくのを惜しみ、どこかで銭塘の蘇小小のような名妓に出会えぬものと、結んでいる。日野龍夫氏はこの詩を、安政四年春の作とされて

いるが、すでに述べたように、柳北が柳橋に出遊して間もない時期の作ということになる。『硯北日録』を参照するかぎり、三月から四月にかけては、それらしき女性の存在も見当たらない。最初に馴染んだ芸妓の小勝の初出は五月二十一日であり、勝の字をヘンの月とツクリの券にほぐして、月券と宛字にするのは、六月十四日を以て初出となっている。

すなわち漢詩の世界では、これくらいの風流の表現は当然のことなのであろう。それにしても二十一歳の青年の作にして、上々の出来と言わねばなるまい。「風流風狂の世界」への下地は、すでに十分そなわっていたのである。

ところで『柳橋新誌』の追補に、柳北は風流の遊びについて、次のように総括する。

風流の遊びは、亦何ぞ彼の醜々營々ウホコケケチチの輩と偕にするを得んや。

其の偕にすべく語るべき者は、則ち唯だ天地間第一等の達士、古今来第一流の才子のみ。達士や才子や、安んぞ多く得べけん。(中略)然りと雖も浩々たる宇内ウチノ、豈に一個の達士才子なからんや。若し此の編をして誤つて其の人の手に落ちしめば、乃ち亦將に余を目するに蚩々シシの徒を以てせんとするか。余亦当に何の辞か以て之に対ふべけんや。夫れ風月の情事、花柳の遊趣、痴に似て痴ならず。俗に近くして俗ならざる、其の訣、之を自得するに在るか。

風流の遊びについて、ともに遊び、ともに語り合うことができるのは、物事のすべてに通暁しているような人物、古今を通じて誰も

が認めるような才能のある人、ということになるのだが、そんな人は滅多にお目にかかれるものではない。そんな人が、もしもこの『柳橋新誌』を手にしたら、愚か者めがと一喝するかもしれない。それに対して何と言いつくすればよいのだろうか。男女の情愛にしても、色里の楽しみ方にしても、愚かな行為であるには違いないが、そうとも言えないところがあるし、くだらない行為と見えても、真面目なところもあるのだ。風流の極意とは、いろいろ悩んだ末に、自分で見つけるしかないであろう。

風流の極意について、結論が出たような、出ていないような、取りあえずこれにて打ち切りとでも言いたげな口調である。この後、日本と中国の史上に遺る名妓艷姫を連ね、美文を以て才子佳人の花柳の遊びを賛美するのだが、そのような理想的風月の世界は、柳北の生きている幕末の時代において望むべくもないことは、『柳橋新誌』に描かれた花柳界の実態が示している。

さて、すでに紹介した、万延元年三月の『硯北日録』の記事にたびたび登場する喬氏の家を、柳北はこの年を通じて、六十数回も訪ねている。喬氏との関係は、前年の安政六年から始まっているようなので、どうやら『柳橋新誌』執筆の時期と重なっており、喬氏と仮名された芸妓の存在が、執筆中の柳北に影を落としていると、前田愛氏は説く。

すなわち、喬氏とはこの年から一年後の文久元年六月、柳北が側室に迎えた柳橋の芸妓お蝶であるとし、「お蝶を側室に迎える決意」と『柳橋新誌』初編の成稿がほぼ時期を同じくしているとするとなら

ば、柳北にとってこの戯著はある意味で柳橋への別れの歌であったといつてもいいのである」とされている。⁽¹⁹⁾

柳北はなぜ断り書きまでそえて、風流の遊びを総括するような追補を行なったのであろう。すでに前年の十一月に編が成っており、しかも文体はルポルタージュ風である。ところが九ヶ月も経った七月に、文体もがらりと変えて追補しているのである。おそらく前田説を援用すれば、十分説明がつくので、やはり、取りあえずこれにて打ち切りとしたかったのだろう。実は日記にもそれとおぼしき形跡が、無くもないのである。十月四日の「送金藏法師于舟」、同二十四日「訪金藏寺不逢」、十二月五日「坤老惨然、有決然之意、可笑」などは一例で、喬氏を張り合っていた地藏院金藏寺の住職に、この時期たびたび喬氏と手を切るように直談判しているように見えるのである。とくに十二月五日の記事には、話が決まったかのような印象がある。

さらに十月以降の出遊の回数が減少し、喬氏宅（当然、柳橋にある）への訪問も少なくなってくるのだ。柳橋との距離が少しずつ遠のき、柳北の関心は、芸妓としてではなく、一人の女性としての喬氏に集中するかのようである。

六 隠棲まで

幕府瓦解までに柳北がたどることになる足跡は、波乱に満ちたものである。この年から数えて三年後の文久三年（一八六三）八月九日、幕閣の因循を諷した狂詩を賦したかどで將軍侍講職を解かれ、

閉門を命ぜられる。慶応元年九月に歩兵頭並に任ぜられるまで、二年間にわたり蟄居の生活をおくるのだが、実は閉門五十日という命だったのである。⁽²⁰⁾したがって、長期にわたる蟄居は、柳北の意思の反映と見られるところがある。

文久三年八月九日から翌年の元治元年六月十三日までの日記『投閑日録』が遺されている。それによると、あの外出好きであった柳北が、邸から一步も出ず、引きこもっている。閉門の日から二日後の十一日には、「余自本日讀蘭文典」の記事が見え、念願の洋学学習の第一歩を踏み出す。外出はしないが、来客は多かった。とくに洋学者の神田孝平、柳川春三、宇都宮三郎、桂川月池などの来訪が目立つ。旧友たちも頻繁に訪れる。漢籍の読書も怠つてはいないようである。

慶応二年（一八六六）横浜の太田屯營に赴任、フランス式三兵伝習に従事する。慶応三年五月に騎兵頭に昇任するも、同十二月には辞任。翌慶応元年一月、外国奉行に任ぜられ、大隅守を名乗る。禄高三千石。ついで会計副総裁に就任。四月十一日の江戸城明渡しの前日、すべての職を辞し、隠棲する。

側室お蝶との関係は持続し、文久三年十二月十九日の『投閑日録』には「阿蝶産男児」の記事が見える。そして明治四年（一八七一）には、妻永井氏の死により、お蝶は正式に柳北の妻となるのである。

注1 成島柳北『硯北日録』成島柳北日記 一九九七 太平書屋

2 源了圓他『江戸の儒学』—『天学』受容の歴史 序Ⅶ頁 一九九八 思文閣出版

3 『古事類苑』第三卷官位部三 八五〇頁 「續泰平年表」天保十四年六月廿六日、奥儒者成嶋圖書頭江御達。奥儒者心得方之義は、先達而御側衆迄、申開置候義有之候得共、一體奥儒者は奥限之勤に而、表方へ可攜筋無之候處、其方儀、大學頭調物に相加り候より、表方之者江も直談等致し、當時は懇意之向も有之、私用之義も申談、又は土圭之間より中之間通に出入致候哉に而、表役同様之振廻、奥儒者之規格取失候段、不都合之事に候。一九八二 吉川弘文館（この項と4項は乾照夫『成島柳北研究』に負う）

4 『新訂寛政重修諸家譜』卷十九 九五頁「信遍 表坊主をつとめ、のち奥坊主を歴て、土圭間の坊主に轉ず。享保四年三月五日信遍學文に入る、により、奥坊主となり、これより有徳院殿（吉宗）の御前にめざれて、しばしば書を講じ、あるひは、御書籍を書寫す」。一九六六 続群書類従完成会

5 『寒檠小稿』卷一 安政元年（柳北詩の訓み下しは『江戸詩人選集』による。「歳晚書懷」は初出時には「歳晚感懷」である）

6 『江戸詩人選集』成島柳北・大沼枕山 日野龍夫注解 五頁 一九九〇 岩波書店

7 新日本古典文学大系『江戸繁盛記 柳橋新誌』三三三頁。一九九六 岩波書店

8 『江戸幕臣人名事典』による。『寛政譜以後旗本家百科事典』には永井主水として記載あり。

9 前掲大系 三三三頁

10 前掲大系 三四〇頁

11 文久二戊辰改正 尾張屋板『本所深川繪圖』御初藏の近くに永井保之丞の家有り。

12 前掲大系 附録 三七九頁

13 前田 愛『前田 愛著作集』第一卷「成島柳北」三三七頁 一九八九

筑摩書房

14 唐木順三『唐木順三全集』第五卷 三四二頁 一九六七 筑摩書房

15 前掲大系 三五七頁

16 永井荷風『荷風全集』第十五卷 三八六頁 一九六一 岩波書店

17 日野龍夫 前掲書 注解 二四頁

18 前掲大系 三七四頁

19 前田 愛 前掲書 三六九頁

20 成島柳北『投閑日録』文久三年九月二十九日の条に、「二十九日 癸酉。霽。參政平岡丹州有簡、令余、底其邸以疾青山芳太請命、丹州傳命、免屏居。欣々幸々」とあり、八月九日の条に「命余免職屏居」とあるの、五十日の閉門であった。注1前掲書に附録影印されている。

参考文献

大島隆一『柳北談叢』一九四一 昭和刊行會

乾 照夫『成島柳北研究』二〇〇三 ぺりかん社

（たかはし・あきお 大学院博士後期課程在学）